

釜山と対馬における朝鮮通信使の遺跡を辿る

ウィ・ソンジュン
魏 聖銓

はじめに

2017年の秋には朝鮮通信使がユネスコ記憶遺産に登録される可能性が高く、これは日本と韓国の長い友好関係の歴史をさらに浮き彫りにする現代の画期的な試みだと思われる。希望に満ちた未来を作るためには、過去を知り、現在の日本と韓国を知ることが大事である。そこで、専修大学社会科学研究所の春季合宿に参加し、釜山と対馬にある朝鮮通信使にかかわる遺跡を巡り、日韓交流の歴史を垣間見ることが出来た。今回は釜山と対馬に残る遺跡や現代に引き継がれている朝鮮通信使について考察してみたい。

1 朝鮮通信使について

「朝鮮通信使」は朝鮮王朝が派遣した使節団で、江戸時代1607年から1811年まで朝鮮から12回にわたり日本まで来た平和使節団を言う。ソウルから江戸まで片道約2200kmを、朝鮮通信使は8カ月から長くは1年近くかけて、往復4400kmの道のりを歩いたことになる。(参考：最後の12回目は対馬で国書の交換式が行われて終了したため、漢陽(現在のソウル)から江戸まで来たのは計11回になる。)

「信(よしみ)を通わす」使節団、すなわち両国の善隣関係を象徴する通信使は徳川将軍が代わる度に来日したが、両国の幕府と朝廷との外交関係だけではなく、一般庶民まで一丸となって朝鮮通信使を260年間も続けられるように支えたことは、現代の我々に示唆するものは多い。

その朝鮮通信使は、正使、副使、従事官の三使と第1級の学者、医者、画家が加わる総勢500人くらいの大使節団だった。対馬藩がこの使節団の案内役となり、日本全国を練り歩くわけだが、多いときは警護などを含むと2000人から3000人くらいの規模の行列が各地を歩いたことになる。

1-1 朝鮮通信使の名称について

朝鮮王朝の前の高麗時代末期から「日本遣使」と「朝鮮通信使」の交流はすでにあったが、最初から「通信使」という名称ではなく、「回礼使」、「報聘使(ほうへいし)」、などの呼び名のあとに、朝鮮第4代国王世宗の時代から「朝鮮通信使」という名称が定着するようになった。14世紀から16世紀にかけても往来がたくさんあったが、文禄・慶長の役の後の「朝鮮通信使」

にもっとも注目すべきものがある。

1-2 朝鮮通信使は、両国の平和使節団であり、国を挙げてのビッグイベント

1607年からの朝鮮通信使は文禄・慶長の役の戦後処理を目的とした講和使節団としての機能を担っていたというところに大きな意義がある。豊臣秀吉が起こした戦争を徳川家康が後処理をするという格好になったが、東洋の平和を重んじ、朝鮮との国交回復という賢明な判断をした家康は今日再評価されるべき人物である。その後も平和使節団としての「朝鮮通信使」は、現代の日本と韓国の人々に教訓を残しており、貴重な歴史として学ぶべきものは多い。その中で一つの例を挙げるとすると、朝鮮通信使が川を渡るとき、船橋（船をつなげて並べ橋にしたもの）を作って通信使たちを渡すのだが、その船橋を作るために動員された人数は、もっとも多いところは6000人くらいだった。大勢の人々が川の勢いを弱めるために代わる代わる川に入った記録もあるくらいで、朝鮮通信使を迎える日本側のホスピタリティ（おもてなし）がよく分かる。

2 朝鮮通信使の行程

朝鮮通信使の旅の行路を簡単に見てみよう。朝鮮通信使はソウルから出発して、一日に30kmから40kmを歩き20日くらいかけて釜山に着き、そこで日本に持っていく荷物をまとめたり、船の整備をしたりして、対馬藩からの使者と合流し、釜山港を船で発つ。

1763年通信使製術官南玉(남옥)の『日観記』によれば、「朝鮮通信使の往復行路は総11,335里(4500km)である」と記してある。

2-1 朝鮮通信使の行路について

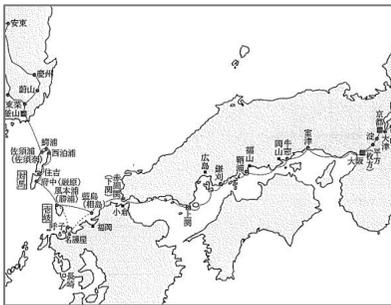
A 陸路 韓国



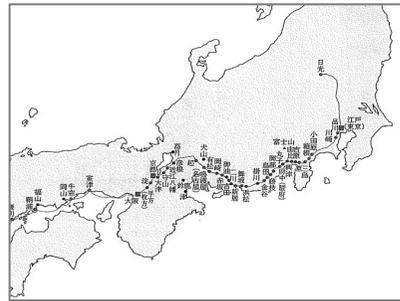
B 海路 釜山と対馬



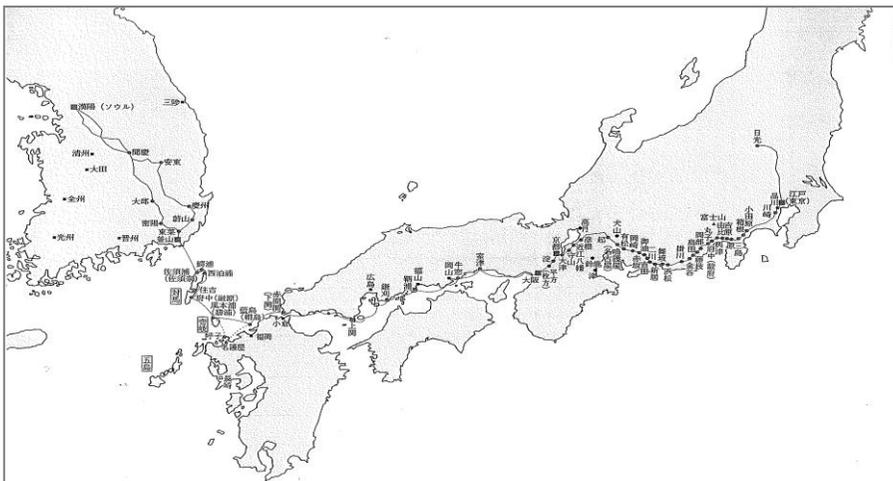
C 海路 釜山から大阪まで



D 陸路 大阪から江戸まで



E 朝鮮通信使節の全行路



(資料) 仁井 [2002] をもとに筆者が編集し、作成。

使行録によれば、国王に拝謁したあと漢陽(現在のソウル)から20日くらいで釜山に至る。釜山を發った通信使は対馬、壱岐、相島(現、福岡県)を経由して、下関(赤間関)に入る。瀬戸内海の上関(山口県)、下蒲刈(広島県)、牛窓(岡山県)、室津(兵庫県)を経て、大阪港に着き、海路の旅は終わる。大阪港からは川船に乗り換えて、淀川を上って京都に向かう。京都から江戸までは陸路の旅になるわけだが、大津、守山、近江八幡、琵琶湖(滋賀県)を左に見ながら、現在朝鮮人街道と呼ばれている道を歩いて進む。彦根、摺針峠(すりはりとうげ)を超え、大垣、名古屋、岡崎、浜松、掛川、静岡(駿河府中)、興津、由比、富士山を左に見ながら、さらに吉原、三島、箱根、小田原、大磯、藤沢、品川の順に移動し、江戸に着く。日光の東照宮にも3度行ったと記録されている。日光の日程や使行録については「(表1) 朝鮮通信使の12回聘礼年表」を参照。

2-2 朝鮮通信使が歩いた主な場所

(1) 韓国ソウルから釜山までの主な場所

ソウルから釜山までの日程であるが、行きと帰りのルートは同じではない。また、国王に謁見する三使以外に招集された人の中には、途中から使行に合流する場合もある。親の忌引きなどの用事で遅れてくる人も、最終的には集結地である釜山で合流することになる。

往路(下行) 昌德宮창덕궁 良才양재 板橋판교 龍仁용인 陽智양지 竹山죽산
無極무극 崇善승선 忠州충주 安堡안보 聞慶문경 幽谷유곡 龍宮용궁 醴泉예천
豊山풍산 安東안동 一直일직 義城의성 靑路청로 義興의흥 新寧신녕 永川영천
毛良모량 慶州경주 仇於구어 蔚山울산 龍堂용당 東萊동래 釜山부산
約418 km (20日くらい所要)

帰路(上行) 釜山부산 東萊동래 梁山양산 無屹무흘 密陽밀양 楡川유천 淸道청도
梧桐院오동원 大邱대구 松林寺송림사 仁同인동 善山선산 五里院오리원 尙州상주
咸昌함창 聞慶문경 延豊연풍 槐山괴산 陰城음성 無極무극 陰竹음죽 利川이천
慶安경안 廣州광주 昌德宮창덕궁

(2) 日本国内、通信使のゆかりの地

対馬(鱒浦、府中) 比田勝、厳原→壱岐(藤本浦、郷ノ浦)→相島→赤間関(下関)
→向島→上関→津和→下蒲刈→鞆の浦→牛窓→室津→兵庫→大阪→淀→京都→伏見→
守山→大津→近江八幡→彦根→今須→大垣→岡崎→赤坂→吉田→新居→浜松→見付→

掛川→金谷→藤枝→静岡→江尻→吉原→三島→箱根→小田原→大磯→藤沢→品川→江戸→日光（3回のみ）

3 対馬と釜山について （2-1 朝鮮通信使の行路の図B参照）

日朝関係において、とくに江戸時代に釜山にあった倭館の意味はとても重要であるが、一部の専門家を除いて、ほとんどの韓国人、日本人にその存在は知られていない。倭館とは、日本人居留地のことである。朝鮮通信使にとっても、釜山（プサン）と対馬の関係は非常に重要であり、その中心にあったのが倭館であったと言えよう。

対馬は山が多く、農業に適さないため、朝鮮との貿易は極めて重要であった。朝鮮も押し寄せてくる日本人との交易のための倭館（ここでは「草梁倭館」を言う）は特別なエリアであった。日常の外交権は朝廷の禮曹が東萊（トンネ）府使に委任し、倭館側は館守が取り締まり役であった。倭館は、朝鮮時代（1392～1910）、15世紀初めから明治期初期まで置かれており、その歴史は長い、その間に、3度の閉鎖があった。1次閉鎖（1419）、2次閉鎖（1510、三浦倭乱が原因で廃止）、3次閉鎖（1592～1598、文禄・慶長の役が原因）はあったものの江戸時代の倭館は1637年から1873年まで236年間続いていた。

3-1 釜山にある「草梁倭館」

草梁倭館は、現在の釜山広域市南浦洞の龍頭山公園の一带に、1678年新築された日本人（ほとんどが対馬の人）居留地で朝鮮国との外交や貿易を行った。倭館に居住することを許された日本人は、対馬藩から派遣された館守以下、代官（貿易担当官）、横目、書記官、通詞などの役職者やその使用人、貿易商人、小間物屋、仕立屋、酒屋などの商人、更には医学及び朝鮮語稽古の留学生も滞在していた。住人は常時400人から500人滞在していたと推定されている。草梁倭館の広さは約10万坪といわれ、長崎出島の約25倍の広さである。写真3-3-2の龍頭山公園には草梁倭館跡記念碑があり、この一带が昔の倭館の場所である。

草梁倭館の工事のために朝鮮側で動員された人数は約120万人、給料として支払われた米と報酬について、『草梁倭館』（崔次鎬2014、pp79-80）に次のような記述がある。

『交隣志』に、～ 然米為九千余石、銀六千余両（中略）

また、工事に関わる費用の内訳についても詳細な記録があるが、ここでは省略する。

鎖国時代の日本人町を幕府が公認したもので、第3代将軍徳川家光の鎖国令にも関わらず、朝鮮とは釜山にある倭館を通じて、日朝の善隣外交と貿易を許可していたことは史実であり、重要な点である。

写真 3-1-1 現在の草梁倭館跡 記念碑



写真 3-1-2 龍頭山公園



3-2 釜山にある「朝鮮通信使歴史館」

日韓の平和使節団としての朝鮮通信使の業績を振り返る朝鮮通信使歴史館が 2011 年 4 月 21 日子城台（ジャソンデ）公園の敷地に開館した。通信使の「通信」というのは今日使われるような意味ではなく、「信じる気持ちで相互に交わり理解し、通ずる」という意味で今後の日韓関係に大いに参考になるであろう。日韓の緊張関係を交隣・善隣友好思想を基にして、両国民の平和的關係を維持させた公式的な外交使節団の活動と記録を垣間見ることのできる場所である。

写真 3-2-1 朝鮮通信使歴史館



写真 3-2-2 朝鮮通信使歴史館の 2 階



写真 3-2-3 歴史館室内の朝鮮通信使人形



写真 3-2-3-1 歴史館室内の 2 階



釜山にある朝鮮通信使の足跡は多いが、今回は、実態調査で訪れた永嘉台と、釜山駅、釜山港を写真で紹介することにしたい。

現在の永嘉台は、朝鮮通信使歴史館の2階にある連絡口からも見学ができる。元の場所（釜山鎮市場路 20-54）から移転したものである。朝鮮通信使が釜山から出発する前に、安全航海を祈る儀式すなわち「海神祭」が行われた場所である。

写真 3-2-4 永嘉台



写真 3-2-5 釜山駅



写真 3-2-6 釜山港



写真 3-2-7 太宗台（テジョンデ）



日本人にとって、釜山と釜山港は馴染のある地名だろう。今回の実態調査で滞在した韓国のホテルは釜山駅から歩いて1分くらいのホテルだったが、ここも草梁倭館から近い場所であった。実態調査の参加者とホテルの裏にある韓国の屋台で、朝鮮通信使について大いに語り合った。1000年前の祖先も、400年前の朝鮮通信使の一行もこの釜山から対馬に渡ったのである。釜山は景観も美しく、通信使の使行録にも釜山滞在中に正使や副使が釜山の名所を観光したという記録が数多くある。朝鮮通信使が日本に経つ前に釜山で諸々の準備や点検などで待機する間に、釜山観光遊覧をしたが、その中でも、太宗台（テジョンデ）というところは時代を超えた有名な名所の中のひとつである。

3-3 朝鮮と対馬との貿易について

朝鮮通信使の往来が日本にとっても成果をもたらしたことで、幕府から対馬が対朝鮮貿易を独占する許可を得ることになる。柳川事件後もさらに対馬の朝鮮国に対する貿易がより活発になった。日本の銀は世界的に認められ、江戸時代には世界で銀の生産量1位であった。当時銀で高麗人參を買う日本人の間では、「高麗人參」は万病を直すというわさが江戸中に広まっており、高麗人參代として純度の高い銀が使われたが、普通の銀とは形状が異なっていた。

朝鮮と対馬の交易は、東アジアの経済に多大な影響を与えたと考えられる。田代和生(2002)に記された以下の記述は当時の貿易状況が良く示している。対馬と朝鮮貿易に大きな影響を与えたのは、1695年に江戸幕府が金銀貨幣の純度を落としたことであり、幕府はそれによって財政を補おうとした。以下、田代(2002)、105頁の「貞享元年(1684)私貿易取引表」を参考に簡単に両国の輸出品を記す。

朝鮮と対馬との貿易の輸出品、輸出品

1 公貿易、私貿易共に輸出品としては白糸、朝鮮人參などが多くを占めている。

2 日本からの輸出品(銀、鉛、銅、真鍮、狐皮、狸皮、たばこ、コショウ)

韓国からの輸出品(白糸、模様の無い織物、縮緬(絹の一種)、虎の皮、朝鮮人參など)

3-4 朝鮮と対馬の交流の過去と現在

3-4-1 両国の訳官の養成と日本語教材と韓国語教材

江戸時代の日朝関係が善隣友好であったことは世界にも類を見ない事実だが、それに大きく貢献した人物の一人を取り上げたい。雨森芳洲である。3-4-2で詳細を述べるが、善隣外交のために相互理解が肝心要であるとし、自ら朝鮮語を勉強し、『交隣須知』という韓語(韓国語・朝鮮語)学習書も作り、朝鮮語の訳官の養成にも力を注いだ。

1 朝鮮側：倭学庁(1682)で日本語を教える。教科書：捷解新語(チョペシノ)、康遇聖(カン・ウソン、慶尚道晋州)司訳院(禮曹所属)で倭学訓導10人を置いて、日本語を教えた。

2 日本側：一方対馬では、朝鮮語を勉強するために、雨森芳洲が『交隣須知』を作り、対馬で韓国語を教えていた。これは、明治期以降にも韓語(韓国語・朝鮮語)学習書として多く用いられることになる。

3-4-2 雨森芳洲と交隣提醒

雨森芳洲は、江戸幕府が鎖国時代にあっても国際人であり、芳洲の名著「交隣提醒」には、「たがいに欺かず、争わず、誠実と信頼が肝要」と説き、対等の交隣思想と誠信を訴えた外交官であった。

以下、長崎県立対馬歴史民俗史料館の前にある記念碑に書いてある説明文を見てみよう。

雨森芳洲（1668～1755）寛文八年、現在の滋賀県長浜市高月町雨森に生れたというのが生誕地には異説もある。幼少より京都で家業の医学を修めたが、のち儒学を志し、十七歳で江戸に出て木下順庵の門に学ぶ。新井白石、室鳩巢、榭原篁州、祇園南海らと木門の俊英と称されたが、後に幕府の執政となった新井白石と日本国王号問題で対立し、論争におよんだ経緯はよく知られている。

22歳で師の推挙により対馬藩に仕官。以来六十余年、朝鮮外交の衝に当り、朱子学の名分論を通して隣国との交渉に活躍した。

朝鮮語、中国語にも精通した芳洲は、第九回朝鮮通信使の製述官申維翰も、その著「海游録」で、偉大な人物として紹介している。鎖国を方針とした江戸時代に、稀有の国際人であった芳洲の名著「交隣提醒」には、「たがいに欺かず、争わず、誠実と信頼が肝要」と説き、対等の交隣思想と人道主義的信念が貫かれている。この誠信の交隣こそ現代にも通じる理念として、日韓新時代を迎える今日、ここに改めて顕彰するゆえんである。

写真の3-4-2-1の雨森肖像画は、滋賀県長浜市高月町にあり、雨森芳洲の遺品や資料が保管されている「芳洲庵」所蔵である。

写真 3-4-2-1 雨森芳洲の肖像画



写真 3-4-2-2 芳洲庵の展示室



3-4-3 二つの芳洲会

雨森芳洲生誕の地である滋賀県長浜市高月町と、芳洲が長年生活していた対馬市厳原町日吉地区の両方に芳洲会があるが、二つの芳洲会の交流についてその活動の一部を紹介する。

大正 13 年に芳洲会が設立 雨森芳洲神社

昭和 29 年 雨森芳洲保育園 設立

昭和 59 年 雨森自治会の 36 名が対馬へ雨森芳洲の墓参り行った。その時にまだ対馬には芳洲会はなく、日吉地区の有志が中心になって対応していた。

その際に、雨森芳洲の思想を継承するための活動や交流をしようという意見を交換した。

平成 2 年、韓国のノテウ大統領の演説をきっかけに対馬でも「芳洲会」を作ることになった。

平成 2 年から、双方で芳洲の顕彰事業に取り組むが、雨森芳洲が亡くなったことに関連する行事に関しては対馬で催しを行い、雨森芳洲の生誕に関連する行事などは雨森自治会が中心になって、高月町で行うということで現在まで続いている。最初は 2 年に 1 回のペースでスタートして現在も続いている。

初期は高月町では「雨森自治会」と対馬では「日吉地区」、「厳原町（現在は対馬市）」、「芳洲会」が合同で交流を重ねてきた。現在は、行政の合併などにより、雨森自治会と長浜市が一緒になって活動を続けている。

写真 3-4-3-1 高月町の芳洲庵の写真

(滋賀県長浜市高月町 東アジア交流ハウス雨森芳洲庵)



3-4-4 朝鮮通信使再現行列

朝鮮通信使行列パレードは釜山でも大々的に行われている。対馬の「厳原港まつり」は 1964 年に初めて開催されたが、その後「厳原港まつり対馬アリラン祭り」に改名され、2013 年から

は「対馬！厳原港まつり」に変わった。現在は毎年8月第1土・日曜日の二日間、厳原港と東浜埠頭をメイン会場として開催される。土曜日が前夜祭で、子供の神輿が出る行列も面白い。日曜日が本祭となるが、大体午後3時前後に金石城の櫓門から行列がスタートする。真夏にも関わらず、暑さを忘れるほど朝鮮通信使行列再現は見ごたえある。毎年釜山文化財団の協賛で、舞踊団が行列の中で踊るが写真のとおり美しい。パレードが終わると今度は、ステージで「演芸の夕べ」がはじまる。朝鮮通信使行列はこの祭りのメインイベントである。

主催団体は、「港まつり振興会」であるが、実行委員会は、実質的に対馬市商工会青年部（厳原支部）が担っている。住民の協力の元で、厳原町商工会と厳原町観光協会の共催で、当初から行われている。

また、お疲れさまパーティーが NPO 法人朝鮮通信使縁地連絡協議会の理事長の松原一征さんの会社の屋上で行われ、花火が目の前で見られるのだが、祭りの関係者や朝鮮通信使行事の関係者、NPO 法人の関係者が集い、朝鮮通信使の話や祭りの話に花が咲き、花火を見上げるひまもないほどだった。

理事長の松原さんは、誠信の理念のもとで、対馬の発展、対馬と釜山との交流を継続して行っていくことが、日本と韓国の善隣友好に大きく貢献できると述べている。

写真の p3-4-4-1 から p3-4-4-5 までは、2016 年 8 月 6 日に行われた朝鮮通信使行列の様子で、p3-4-4-6 は清水城の三の丸から眺めた厳原港と厳原町の風景である。

写真 3-4-4-1 厳原港まつりのポスター



写真 3-4-4-2 行列スタート



写真 3-4-4-3 行列の中の韓国踊り



写真 3-4-4-4 朝鮮通信使行列再現パレードと厳原港まつり



写真 3-4-4-5 行列の様子



写真 3-4-4-6 清水城三の丸から見える厳原港



3-4-5 日朝善隣友好を側面的に支えた漂流屋跡

朝鮮とかかわる漂流民は、ほとんど対馬を経由して母国に送還していたことから「漂流屋」の役割は日朝友好に多大な影響を与えたに違いない。

厳原港の奥にある「漂流屋跡」には案内板があるが、奥まった場所にあるうえに韓国語表記がないので、今後韓国語を追記して、韓国人にも対馬の人々の努力を分かってもらいたい。

現在、対馬古文書研究会が宗家文庫史料にある「朝鮮人漂流民関係の文書」の現代語訳を進めている。

以下、漂流屋の文を紹介する。

「漂流屋」は日本の沿岸に漂着した朝鮮人漂流民を丁重に保護し、宿泊させ、本国へ無事に送還するための拠点施設であった。

この漂流民送還は、国交が断絶していた時代にも変わることなく、親朝鮮政策として人道的立場から継続され、貿易を復活させる要因ともなった。朝鮮通信使が国家的レベルの華やかな交流であったのに対し、漂流民政策は、それを側面的に支えながら日常的に行わ

れた交流であり、江戸時代の善隣友好の基盤を育んだ施設であったといえる。(厳原町教育委員会)

江戸時代には朝鮮側でも日本側でも漂流民はそれぞれ漂着したら現地の負担で保護し、送還する取り決めがあった。

4 社研春季研修会 旅程 3月14日—17日(対馬(3月15日～16日))

対馬の滞在期間は、3月16日、17日だったが、比田勝から厳原へいく途中、韓国展望所、佐賀の圓通寺、竜宮伝説の和多都美神社(わたつみじんじゃ)や大船越、万関橋を効率よく見学することができた。翌日に行った金田城(かねたのき)についても少し言及する。

4-1 韓国展望台：気象条件が良ければ韓国釜山市の街並が望め、「国境の島」であることを実感出来るところ。今回はあいにくの天気で釜山は見えなかったが、日本と韓国の近さを肌で感じる事が出来た。

この展望所は韓国の古代建築様式を取り入れて建造されており、展望台についてはソウルのパゴダ公園にある多目的施設をモデルにしている。4-1-2の写真でも分かるように、釜山は見られなかったが、夜の方が釜山の街の光が見えると地元の方に教えてもらった。

写真 4-1-1 韓国展望所



写真 4-1-2 展望所からの眺め



写真 4-1-3 朝鮮国訳官使受難之碑



4-2 朝鮮国訳官使受難之碑

韓国展望所のすぐ隣に、写真 4-1-3 の「朝鮮国訳官使受難之碑」が建立されている。

朝鮮国訳官使は、朝鮮通信使と違って、徳川將軍家及び対馬宗家の慶弔などの折に訪問したり、朝鮮通信使の関連の準備などを事前に協議したりするために派遣された使節である。

韓国展望所のすぐそばにある「朝鮮国訳官使殉難之碑」は、1703 年 2 月 5 日に水難で亡くなった訳官使一行 112 名の数の石で造られている。その碑の左前には、「朝鮮國譯官並従者殉難靈位」として全員の氏名を記してある。その説明文を下に記す。

「朝鮮國譯官並従者殉難靈位」

1703 年 2 月 5 日（陰曆）殉難した 112 名の名簿が不明のまま、1991 年 112 個の靈石で殉難碑を建立したが、最近、「宗家文庫史料」より「渡海譯官並従者姓名」という墨書小冊子が発見された。今日、殉難 300 周年を迎え、「朝鮮國譯官並従者殉難靈位」を刻して追悼し建立す。

4-3 大船越と万関橋

長崎県対馬市の美津島町。浅茅（あそう）湾の南東隅に位置する。古代、小船以外は対馬海峡から浅茅湾に入るためには、対馬の南端または北端を大迂回（うかい）しなければならなかった。そこで、対馬海峡と浅茅湾の間の地峡部を人力により船を運搬するか荷を積み替える場所として大船越と小船越（こふなこし）が栄えた。江戸時代になって大船越に人工的に瀬戸が造られ、対馬海峡と浅茅湾は通じたが、明治時代になって大船越瀬戸が浅く、日本海軍の、艦艇の出入りができないため、1900 年（明治 33）万関（まんぜき）瀬戸の新しい運河を開き、橋（万関橋）が架けられた。

（出典：<https://kotobank.jp/word/%E5%A4%A7%E8%88%B9%E8%B6%8A-1512805>）

写真 4-3-1 大船越



写真 4-3-2 万関橋



4-4 李藝の顕彰碑 円通寺（朝鮮前期の通信使の一人）

円通寺宗家墓地（県指定史跡）峰町佐賀に府が置かれた時代（1408～1468）、円通寺は対馬島主宗家の菩提寺だった。墓地には当時宗家墓所として中世の宝篋印塔がならんでいる。

朝鮮前期 通信使を務めた 忠肅公 李藝 1373-1445）は、朝鮮王朝前期（日本では室町時代）に国王使節として四十余回日本へ遣わされた。李藝は、日本往復の途次に対馬に寄るだけではなく、対馬までの正使として何度も来島した人物である。李藝の日朝外交に対する思いと努力は讃えられるべきである。

以下、圓通寺前に、李藝の子孫が建てた顕彰碑の文章を紹介したい。

前略、「李藝の功績は、朝鮮人被虜の刷還や足利將軍等に贈る大藏經の伝達、また両国の文化交流に寄与したことが挙げられるが、対馬からみた最大の功績は対馬と朝鮮国の「通交貿易」に関する条約締結に大きく尽力したことで、これにより倭寇が鎮まり対馬に明るい時代がおとずれたとされる。

当時の対馬島主は、宗家七代貞茂、八代貞盛の時代で、この地に国府があり、貞茂の死に際し弔慰使として遣わされた李藝が「円通寺に至り香典を供えて祭をした」と朝鮮国王に報告している。

李藝が刷還した被虜の数は667人に及ぶが、幼少のころ倭寇に拉致された母とは遂に再会することができなかったと伝えられる。

李藝の驚異的な行動は賊と誹られる人たちとも付き合うという怨念を超えた情誼を披瀝し、絶大の貢献をしたことを思うとき、その人柄と底知れぬ度量に感動し畏敬の念をもってその功績を顕彰したい。

次に、以下の写真にある「対馬の円通寺の梵鐘」についての説明文も下に記す。

「宗氏は 1408 年から 1468 年の 60 年間、3 代（7.8.9 代）にわたり対馬の拠点として峰町佐賀に島府を置きました。この間、島内の肅正倭寇の取締九州本貫地の奪還戦、そして応永の外寇などを経験しています。円通寺は 宗氏の菩提寺で、本尊の銅造薬師如来坐像（高麗時代）、梵鐘（李朝前期鑄造）が県の指定文化財となっています。」

写真 4-4-1 李芸の顕彰碑



写真 4-4-2 円通寺の梵鐘



写真 4-4-3 宗家の宝篋印塔群



4-5 金田城（かねたのき）

防人跡や明治時代の砲台などがある。城山（じょうやま）は、対馬の中央に広がる浅茅湾に突き出した岩山で、山頂や谷間を取り囲んで、巨大な石塁が築かれている。今から 1300 年前、白村江（はくすきのえ）の戦いに敗れた大和朝廷は、大陸からの侵攻に備えて対馬に古代山城・金田城（かねたのき）を築いた。城山は日露戦争時にも要塞化され、古代と近代の「国防の最前線・対馬」を体感できる。城山は標高 276m、金田城跡は国指定特別史跡で、今も城戸（きど）や石塁が残る。（出所：<https://www.orc-air.co.jp/tsushima/51791/>）

因みに、対馬には城跡が 4 つもあり、中央部の浅茅湾¹ 西海岸線に「金田城（かねたのき）」

あと3つの城跡は城下町厳原にある。江戸時代に築城された“金石城（かねいしじょう）”と“棧原屋形（さじきばらやかた）”。もう一つは、朝鮮出兵の際に、豊臣秀吉の命によって築かれた駅城“清水山城”築城は対馬の領主宗氏が中心になり、相良長毎（肥後人吉城主）、高橋直次（筑紫三池城主）、筑紫広門（筑後福島城主）が支援した。

（出所：<https://blogs.yahoo.co.jp/milkmikky22/57401765.html>）

写真 4-5-1 金田城に上がる道



4-6 宗義智の銅像

宗義智は豊臣秀吉の天下統一から徳川幕府の初期の頃に、対馬島主宗氏の20代当主となった。文禄・慶長の役では豊臣秀吉の命で、小西行長の一番隊に属して日本軍の先鋒に立たされたが、戦後、徳川幕府からは朝鮮との外交回復を命じられ、そのために尽力した人物である。

写真 4-6-1 宗義智²の銅像



4-7 西山寺

巖原港近くの高台にある西山寺の地には江戸時代の後期に朝鮮との外交機関「以酌庵」が置かれていた。以酌庵には柳川一件以後対馬藩の朝鮮外交に対して派遣された幕府の目付役として、京都五山から選ばれた学問僧が交代で常駐している。その以酌庵は享保 17 年（1732）日吉にあったが焼失し、西山寺に移転したため、西山寺は中村の瑞泉院に移った。そして、明治元年に以酌庵が廃寺となると、西山寺は故山に還った。境内には日吉から移された景轍玄蘇の墓もあり、1590 年（天正 15 年・宣祖 20 年）の通信使の副使金成一の碑もある。西山寺は現在、宿泊施設も兼ねている。

写真 4-7-1 西山寺の入り口



写真 4-7-2 景轍玄蘇³（けいてつげんそ）



4-8 対馬歴史民俗史料館

宗家の古文書など対馬に関連する資料や書籍が多数。建物の前には「誠信の碑」、「朝鮮通信使の碑」がある。（資料を閲覧するためには事前予約が必要である。）

写真 4-8-1 誠信の交隣碑



写真 4-8-2 朝鮮通信使の碑



4-9 金石城櫓門、万松院⁴（宋家の菩提寺）

朝鮮通信使再現行列の時は、この金石城の櫓門からスタートするがなかなかいい眺めである。万松院は宗家の菩提寺で、徳川歴代将軍の位牌や朝鮮国王から贈られた仏具である三具足などが公開されている。

写真 4-9-1 万松院



写真 4-9-2 金石城の櫓門



写真 4-9-3 三具足



5 朝鮮通信使をユネスコ世界記憶（記録）遺産に日本と韓国が共同申請

NPO 法人朝鮮通信使縁地連絡協議会と釜山文化財団、つまり日本と韓国の民間団体が中心になって、ユネスコ世界記憶（記録）遺産に共同申請をしたことはとても大きな意義があると考えられる。

2016年2月26日に韓国のソウルで行われた「朝鮮通信使シンポジウム」で報告されたユネスコ世界記憶（韓国では、ユネスコ世界記録という名称になっている。）遺産に共同申請要旨について記す。

1. 申請者（日韓の民間団体）

日本側：NPO 法人 朝鮮通信使縁地連絡協議会

韓国側：財団法人 釜山文化財団

2. 申請時期と決定予定

申請予定：平成 28 年（2016 年）3 月下旬

決定予定：平成 29 年（2017 年）6～9 月ユネスコ国際諮問委員会（ICA）招集時期で異なる

3. 選定資料の内容

1 外交記録

朝鮮国書（日本、東京国立博物館）

通信使登録（韓国、ソウル大学校奎章閣）

2 旅程の記録

東槎日記（韓国、ソウル大学校奎章閣）

朝鮮通信使参着帰路行列（日本、高麗美術館）

3 文化交流の記録

雨森芳洲関係資料（日本、高月観音の里歴史民俗資料館）

チョウ・テオク 趙泰億 像（韓国、国立中央博物館）

東照社縁起（仮名本）（日本、日光東照宮）

4. 申請リストの内容

申請件数 日本側 48 件 209 点

韓国側 63 件 124 点

合計 : 111 件 333 点

6 朝鮮通信使がもたらしたものの

6-1 行列図は文化交流が描かれている芸術作品

行列図は日本側が次に来る朝鮮通信使のための参考として描かれたものなどがあるが、どれも美しく芸術性が高いものが多い。絵師や時代によって画風が異なって、時代別の複数の行列図を見比べてみるだけでも面白い。

◇ 佐倉国立歴史民俗博物館にある屏風江戸城の屏風（狩野派の絵）

- ① 朝鮮王朝通信使の来訪（左隻 2 の中下） 江戸時代には、朝鮮王朝から通信使が 12 回にわたり派遣された。この絵は、江戸に到着の後、江戸城中に入る直前の様子を描いている。

家光の治世下には3回の来訪があったが、のちには將軍の襲職の祝賀に限られていった。

- ② 江戸城天守（左隻1の中上） 屏風には、家光の盛時を示す意図から江戸城天守が大きく描き込まれている。この天守は江戸城としては3度目のものとして、寛永15年（1638）に完成した。基壇から上端までの高さは、約60尺に及んだ。しかし、明暦3年（1657）の大火の折に焼失し、以後江戸城の天守閣が再建されることはなかった。

6-2 日本各地での朝鮮通信使行列の再現

対馬をはじめ日本の各地で朝鮮通信使行列の再現が行われている（過去36回行われている）。2016年には京都（2回目）、静岡（9回目）でも行われた。自治体、地域の商工会、地元の皆さんの協力で成り立っていることが重要である。

7 終わりに

朝鮮通信使は、平和のもとで、相手の国への尊重、誠信の精神で成り立った使節団である。朝鮮通信使の伝統を継承していくことで、民間レベルでの交流が政治にも外交にも影響を与える社会になりつつあるように思われる。

「朝鮮通信使が今後も注目されれば、今まで以上に日本と韓国の友好の歴史が知られるようになり、歴史からの教訓を共有すれば、日韓関係の未来は明るいでしょう」と語る NPO 法人朝鮮通信使縁地連絡協議会理事長の松原一征氏のことば通り、日韓友好の未来は明るい。

しかし、伝統と継承の問題については真剣に考えなければならない。一例をあげるならば、鈴鹿市東玉垣町の和田佐喜雄さんは、「唐人踊りを踊る子供達も、いままでは女の子はできなかったけれど、少子化の影響で今年からは女の子にも声をかけて練習に参加してもらっています。そうしてでも良い伝統は継いでもらいたいと思っています。」と語る。

世界記憶遺産に朝鮮通信使が登録される事は喜ばしいが、将来登録されたとしてもこれからのように発展させ、継承していくか、さらに、朝鮮通信使について学んで日韓友好や世界の平和にどのように貢献していくかを両国ともに真剣に取り組んでいかねばならない。

参考文献

1. 金井三喜雄 [2008] 21世紀の「朝鮮通信使を歩く」—ソウル-東京友情ウオーク
2. 金仁謙、高島淑郎 [1999] 日東壮遊歌—ハンゲルでつづる朝鮮通信使の記録（東洋文庫）
3. 嶋村初吉 編著、嶋村初吉 [2010] 玄界灘を越えた朝鮮外交官 李芸一室町時代の朝鮮通信使—

4. 辛基秀、仲尾宏 [2000] 図説・朝鮮通信使の旅
5. 辛基秀 [2002] 朝鮮通信使の旅日記—ソウルから江戸「誠信の道」を訪ねて PHP 新書
6. 申維翰、姜在彦 [1974] 海游録—朝鮮通信使の日本紀行（東洋文庫 252）新書
7. 田代和生 [2002] 『倭館』文芸新書
8. 仲尾宏 [2001] 『NHK 人間講座 朝鮮通信使』2001 年 4 月～5 月
9. 仲尾宏 [2007] 朝鮮通信使—江戸日本の誠信外交（岩波新書）
10. 仲尾宏 [2011] 朝鮮通信使の足跡—日朝関係史論— 明石書店
11. 永留史彦 ほか編者 [2014] 対馬の交隣 交隣舎
12. 仁井孝雄 [2002] 友好交流を支えた・苦難の 4000 キロ「朝鮮通信使の道」仁井孝雄写真集 杉屋書店
13. 日韓共通歴史教材制作チーム [2005] 日韓共通歴史教材 朝鮮通信使
14. 한태문 [2012] 조선통신사의 길에서 오늘을 묻다（朝鮮通信使の道で今日を尋ねる）
경진（キョンジン）

参考)

1 浅茅湾（あそうわん）

日本有数のリアス式海岸で、古から大陸との交通の要所。幕末にはロシア帝国の軍艦ボサドニック号湾内の芋崎を占拠し、半年にわたり滞留する事件も起こった。日露戦争時には日本の水雷艇は開削した万関瀬戸、あるいはこの湾を通り出撃した。湾の周囲に約 10 か所の砲台が築かれたことを見ても戦略的な重要性が分かる。

2 宗義成： 義智の後を継いで対馬府中藩の第 2 代藩主、文禄・慶長役と戦後復興に勢力を尽くした義智の長男で、元和元（1615）年から明暦三（1657）年に没するまで対馬島主だった。柳川氏の讒言事件をのりきり、幕府と朝鮮側双方に信頼を得た。その正室は日野大納言資勝の娘で、宗家としては京都の公家から迎えた唯一の女性である。院号は光雲院。

3 景轍玄蘇（けいてつげんそ）は、安土桃山時代から江戸時代初期にかけての僧。対馬宗氏の外交僧として活躍し、没後は門人の規伯玄方が跡を継いだ。以酌庵は玄蘇が生まれた年にちなんで名づけられた。

4 万松院（ばんしょういん）

宗義成が、父義智の冥福を祈って 1615 年に建立。宗家の菩提寺として特別の崇敬を受けてきた。百雁木と呼ばれる石段を上ると、樹齢 700 年を超える大杉に見守られた墓域が現れる。桃山様式の山門や徳川歴代将軍の位牌、朝鮮国王から贈られた仏具の三具足などが公開され、往時の栄華がしのばれる。

表1) 朝鮮通信使の12回聘礼年表

(出所：仲尾宏 [2001]、156-7頁と한태문 [2012] 30-31頁を参考に一部加筆。)

西暦	年代		正使	副使	従事官	聘礼名目 使名	総人員(大阪 留)	使行録	備考・出来事など
	朝鮮 日本	干支							
1607 1回目	宣祖40	丁未	呂祐吉 (癡溪)	慶暹 (七松)	丁好寛 (一翠)	国交回復 回答兼副使使 倭情探索、被慮人の副使	504 [100]	海槎録 (慶暹)	鎌倉遊覧、駿河湾遊覧 洛中遊覧
	慶長12								
1617 2回目	光海君9	丁巳	吳允謙 (楸灘)	朴梓 (雲溪)	李景稷 (石門)	大坂平定 回答兼副使使 倭情探索、被慮人の副使	428 [78]	東槎上日録 (吳允謙)	京都伏見聘礼
	元和3							東槎日記 (朴梓)	被慮人説諭官巡回
1624 3回目	仁祖2	甲子	鄭崐	姜弘重 (道村)	辛啓榮 (仙石)	家光襲職 回答兼副使使 倭情探索、被慮人の副使	460 [114]	東槎録 (姜弘重)	被慮人説諭官巡回
	寛永元								鳥銃購入
1636 4回目	仁祖14	丙子	任統 (白麓)	金世濂 (東溟)	黄辰 (漫浪)	泰平之賀	478 (不明)	丙子日本日記 (任統)	日本国大君号制定
	寛永13							海槎録 (金世濂)	日光山遊覧
1643 5回目	仁祖21		尹順之 (滄溟)	趙綱 (龍洲)	申濡 (竹堂)	家網誕生	477 (不明)	東槎録 (趙綱)	日光山東照宮
	寛永20							海槎録 (申濡)	靈廟致祭
1655 6回目	孝宗6	乙未	趙斡 (翠屏)	俞瑒 (秋菴)	南龍翼 (壺谷)	家網襲職	485 [100]	扶桑日記 (趙斡)	日光山大猷院
	明暦元							扶桑録 (南龍翼)	馬上才はなし
1682 7回目	肅宗8	壬戌	尹趾完 (東山)	李彦綱 (鷺湖)	朴慶後 (竹庵)	綱吉襲職	473 [113]	東槎日記 (金指南)	馬上才(八代洲河岸)
	天和2							東槎録 (洪馬載)	
1711 8回目	肅宗37	辛卯	趙泰徳 (平泉)	任守幹 (靖菴)	李邦彦 (南岡)	家宣襲職	500 [129]	東槎録 (趙泰徳)	新井白石の改革
	正徳元							東槎録 (任守幹・李邦彦)	馬上才(田安門内)
1719 9回目	肅宗45	己亥	洪致中 (北谷)	黄瑔 (鷺汀)	李明彦 (雲山)	吉宗襲職	475 [129]	海槎記録 (洪致中)	馬上才(田安門内)
	享保4							海游録 (申維翰)	弓射芸(上野車坂町)
1748 10回目	英祖24	戊辰	洪啓禧 (滄窩)	南泰耆 (竹裏)	曹命采 (蘭谷)	家重襲職	475 [109]	扶桑紀行 (鄭后僑)	所司代問慰
	延享5 (寛延元)							扶桑録 (金滄)	
1764 11回目	英祖40	甲申	趙曦 (濟谷)	李仁培 (吉菴)	金相翊 (弦庵)	家治襲職	477 [110]	海槎日記 (趙曦)	馬上才(田安門内)
	宝暦14 (明和元)							未使行日記 (吳大猷)	弓射芸(上野下寺町)
1811 12回目	純祖11	辛未	金履喬 (竹里)	李勉求 (南霞)	廃止	家育襲職	328	日本録・桂上録 (成大中)	朝鮮人国役金御免越訴
	文化8							仙槎漫浪集 (成大中)	所司代問慰
								興槎録・和園志 (元重挙)	
								日東社遊歌 (金仁謙)	
								辛未通信日録 (金履喬)	对馬府中聘礼
								東槎録 (柳相弼)	馬上才はなし
								島遊録 (金善臣)	